

太宰治記念館開設にとともなう 「太宰治研究会」設立の夢



長野 隆

どなたへ向けて発していいものやら、とにかく、太宰治記念館(旧斜陽館)なるものが太宰の没後五十周年に歩調を合わせて四月十七日に開館するが、であればこそ「太宰治研究会」のようなもの、いち早い創設を願ってやまない。「記念館」の自ずからなる充実のためにも、それは必須な要請にみえるし、組織の大小云々を問わなければ「研究会」自体の設立に困難はさしてない。が、具体的にその全貌を思い巡らしてみると、問題は意外に多い。簡単には行きそうにないのである。

近年、この種のもので最も成功した例に、中原中也記念館がある。つまり、そこを拠点とする組織としての「中原中也の会」であり、その会の「会報」および「中原中也研究」なる研究雑誌の発行と「中原中也賞」の設置である。この記念館(中原中也の会)は、中原中也の生地である山口県山口市湯田温泉にあり、公開講座やシンポジウムその他、実に旺盛な文化活動をみごとに実現している。質の高さは、その会報と研究誌を手にするだけで即座に判明する。何故こうも上手く行くのかと傍目から心配なくらいで、センスの良さも全国(中央)レベルに一步たりとも譲らない。そういう意味では宮沢賢治記念館以上ではないかとさえ思えるほどだ。その秘密は、(組織)のありかたにある。一、財源としての山口市(山口市文化振興財団法人)と、地域のみならぬ全国ネットの会員(会費)の拡大。二、

組織の分離分権と理念的収斂。例えば、記念館館長は元山口県立女子大学教授の福田百合子、「中原中也の会」の会長は詩人で文芸評論家の中村稔、事務局長はこれも詩人で文芸評論家の北川透(梅光女学院大学教授)、そして会の理事の幾人かを挙げれば、秋山駿(文芸評論家、飯島耕一(詩人・文芸評論家)、宇佐美斉(京都大学教授)、大岡信(詩人・文芸評論家)、佐藤泰正(梅光女学院大学学長)、吉田熙生(城西国際大学教授)等々、錚々たるもので、誰も文句をつけようがない。また、雑誌「中原中也研究」の編集は佐々木幹郎(詩人・文芸評論家)が執りしきっている。どうであろう。これが元はといえば、地方の小さな「町おこし」から始まったのであるから、感服せざるをえない。だから、私も、少しは夢を見る。太宰治が中原中也に劣るはずはないのだから。

すでに青森県近代文学館を有する当地にとつて、金木の太宰治記念館は、その質実の制限を当然うけなくては済まされない。弘前大学附属図書館にも「太宰治

研究文庫」なるものができた。なにかと管轄や連携のありかたも問われよう。しかし、相互が信頼を忘れず、変な利権に惑わされない良識を(太宰治)という一文化現象をめぐるで交わし合えば、協同で、「太宰治研究会」なるものの設立は可能なのだ。当然、この地域に根ざした、しかも全国ネットの、誰にも何も言わせない研究会の創設を、私は願ってやまない

「人間失格」の生原稿
青森近代文学館蔵・提供：安藤宏氏